

# 仏教における空について

坂部 明

キーワード：空 般若経 智慧 大乘 一切法

## はじめに

本稿は、平成16年12月17日に、長野県総合教育センターにおける、高等学校、中学校の公民・社会科担当の現職教師のための講習会において、テキストとして使用したものに、加筆したものである。そして、本稿は本学部の社会科教育法の資料としての記録となることを期待するものである。また、同上のテキストは、平成17年度前期の「基礎人間学演習V」においても、副読本として使用した。

空の思想は、慈悲の思想とともに、大乘仏教の根幹をなすものとされながらも、教育の場でこれをわかりやすく解説するには困難が伴っている。今日に至るまでわかりやすい解説が教育の場で行われたとは考えにくい。これに対処するには、方策が必要である。この方策をさがすには、空思想とともに般若波羅蜜を説いた『般若経』そのものに解答をもとめるべきと考える。

さて、ここでのテーマとなる「空」という漢字は、この場合「くう」と読み、仏教における術語となることはいうまでもない。しかし、後述するように、原語をひもといてゆくと「そら」(the sky)の概念を含む用語であることには興味深いものがある。(仏教用語では、「そら」を意味するときは「虚空」(こくう)という語を用いることが多いのであるが。)

さて、「空」ということばは、初期仏教(原始仏教)において、ゴータマ・ブッダによつてすでに説かれていた。

「世界(loka)を空なり(suñña)と観ぜよ。」<sup>(1)</sup>のことばをはじめとして、空についての教説は『小空経』<sup>(2)</sup>、『大空経』<sup>(3)</sup>、『無礙解道』<sup>(4)</sup>などにも説かれている。また、経典以外の論書では、『舍利弗阿毘曇論』<sup>(5)</sup>などにも説かれている。しかしながら、空の教義が、ただちに初期仏教の教義を端的に表すものとはいえない。初期仏教を代表する教義とはいえば、「四諦・八正道」、「三法印」(諸行無常・諸法無我・涅槃寂靜、これに「一切皆苦」を加えれば「四法印」となる。)などで表されるのが通例である。

事実、たとえば、最初期の仏典の一つと考えられている『ダンマパダ』において、ブッダは次のようにいう。

「もろもろの道のうちでは(八つの部分よりなる正しい道=八正道)が最もすぐれている。もろもろの真理のうちでは(四つの句=四諦)が最もすぐれている。もろもろの徳のうちで

は（情欲を離れること）が最もすぐれている。人々のうちでは（眼ある人＝ブッダ）が最もすぐれている。』<sup>(6)</sup>

「これこそ道である。（真理を）見るはたらきを清めるためには、この他に道は無い。汝らはこの道を実践せよ。これこそ悪魔を迷わして（打ちひしぐ）ものである。』<sup>(7)</sup>

「空」の思想が前面に押し出されて登場するのは、大乘仏教の先駆的經典である般若經においてである。その後、大乘仏教運動の中で数多くの經典が登場するが、空の思想はそれらに共通する主要な概念となる。

般若經は經名にもあるとおり、六波羅蜜の中心となる実践道「般若波羅蜜」を説く經典であるが、その思想は空と深く関わっているのである。<sup>(8)</sup>

## I 大乘仏教の興起と般若經

大乘仏教がいつごろ興ったかということについては諸説がある。しかし、紀元前1世紀ごろから、紀元前後のころに、インドから中央アジアにかけてのどこかで大乘仏教が興った、というのがほぼ通説である。ただ、大乘仏教運動の最初期に登場した經典が般若經であったのであろうというのは定説である。

現在残っている梵本や漢訳、チベット訳などの資料研究から、般若經典は次の2種類に大別されている。

小品系般若 梵本八千頌般若（現代語訳『大乘仏典・八千頌般若經』中央公論社）

大品系般若 梵本二万五千頌般若（漢訳『摩訶般若波羅蜜經』ほか）

この他には、一万頌般若、一万八千頌般若、十万頌般若（漢訳『大般若經』）などがあり、小本系般若から徐々に増広されていったものと考えられている。また日本人にも親しまれている『般若心經』は、般若經典の最も重要な要点をまとめたものと考えられている、最も短い般若經典である。ちなみに、『般若心經』の「心」とは、最も重要な臓器である心臓を意味する語「フリダヤ」(hr̥daya) のことである。そのほか、『金剛般若經』は空という用語を用いないで空の思想を説いていることから、般若經典類の古層に属するものと考えられている<sup>(9)</sup>また、日本では特に、平安時代において護国經典として『法華經』、『金光明最勝王經』とともに『仁王般若經』が読誦された。これらを、護国三部經という。また、『大般若經』の転読もおこなわれた。これは、般若經が魔を「空ずる」（魔の悪しき力を失わせしめる）はたらきがあると考えられたためである。この信仰は、ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）著『怪談』の中の「耳なし芳一」などで『般若心經』の威力として描かれている。また、般若經の一部を構成する「般若理趣分」は、密教的色彩を有して『理趣經』の名で真言宗では常に読誦されている。

### (1) 般若經に説かれる「大乘」(Mahāyāna)

マハーヤーナとは、船などに代表される「大きな乗り物」<sup>(10)</sup>の意であり、個人としての理想の境地であり、仏教の究極の目標である涅槃（ニルヴァーナ）の意識から、社会の人々、また広く命ある生き物に及ぶ慈悲心として展開される意識、さらには、それを基盤とする行為・実践を比喩的に表現したものである。

この慈悲心を完成するには、仏・如来の智慧である「一切種智」<sup>(11)</sup>に到達することが不可欠である。般若経はこのために声聞・縁覚の二乗から、他の人々の幸せを願う「菩薩道」に心を向けるようにしきりに説く。

さて、大乘とは何かについて、『八千頌般若』第1章において次のようにいわれる。

スプーテイ（須菩提）が世尊に次のように質問する。<sup>(12)</sup>

「大乘とは何でありましょうか。また（菩薩）はどのように大乘に進み入っている  
と知るべきでしょうか。その大乘はどこから出ていくのでしょうか。どちらへその大乘は  
進んで行くのですか。どこにその大乘はとどまるのでしょうか。また誰が一体大乘によって  
出ていくのでしょうか。」

これに答えて世尊はつぎのように言われる。

「スプーテイよ、大乘とは量られないことの異名である。量るものがないからである。  
……中略……大乘は三界から出ていくのであり、所縁に進み、一切種智にとどまり、菩薩  
大士が出ていくのである。しかもなお、それはどこからも出ていくこともないし、何かに向か  
って進むわけでもなく、どこかにとどまるということもない。しかしながら、とどまらない  
で、しかも一切種智にとどまるのである。」と。

大乘といっても、それは固定され、限定されたものではなく、大乘ということにもとらわ  
れてはならない。大乘もまた空なのである。

また、大乘と称せられる実践徳目が、『大品般若経』聞乗品第十八、及び広乗品第十九に  
おいて列挙されている。

「聞乗品第十八」<sup>(13)</sup>

(1) 六波羅蜜, (2) 十八空, (3) 百八三昧

「広乗品第十九」<sup>(14)</sup>

(4) 四念処, (5) 四正勤, (6) 四如意分, (7) 五根, (8) 五力, (9) 七覚分, (10) 八正道  
分, (11) 三三昧（空三昧, 無想三昧, 無願三昧）, (12) 十一智, (13) 三根, (14) 三三昧（有  
覚有観三昧, 無覚有観三昧, 無覚無観三昧）, (15) 十念, (16) 四禅, (17) 四無量心, (18) 四  
無色定, (19) 八背捨, (20) 九次第定, (21) 仏十力, (22) 四無所畏, (23) 四無礙智, (24) 十八  
不共法, (25) 字等語等諸字入門

上記中、下線部の徳目が般若経ではじめて登場する徳目であり、それ以外の実践 徳目は、  
初期仏教にすでに存在している。しかも、それらを含めて「大乘」というのである。このこ  
とからも、大乘仏教を宣言した般若経は、原始仏教以来の徳目を基盤として採用しながら、  
これに大乘の特色を加えて実践徳目の総合化を図ったものと言うことが可能なのである。初  
期仏教の教義を捨てているのではなく、これらをダイナミックに活用させるという大乘の意  
図が明白である。

(2) 小乗（Hīnayāna）について

この「ヒーナヤーナ」という語は、『八千頌般若経』に現れている。原語「ヒーナ」には、  
「小さい」のほかに、「劣った」、「卑しい」というような意味もあり、しばしば高等学校の教  
科書では大乘仏教から、伝統的な仏教を守る人たちへ投げかけた「貶称」（おとしめた名称）

である、という記述がある。漢訳の「小」にも、軽蔑的な意味合いがある。たとえば「小人」といえば、「つまらない、人間として成熟していない人間」を意味するように。

しかし、般若経を読んでみると、「小乗」が、かならずしも「おとしめている」ばかりとは思えない。事実、上述のように、「大乘」の名で初期仏教の実践徳目が採用されているのである。般若経は初期仏教の伝統を受け継ぐ出家者たちが、自分たちの「さとり」のみに専念する姿勢を批判したのである。般若経は、声聞、縁覚の智慧に満足してとどまることなく、命ある生き物たちと共に慈悲に、生きる菩薩たちの智慧に邁進するように強く勧めるのである。「停滞」を戒めるのであって、非難、否定しているのではない。特に日本仏教において「小乗」という貶称が強調されすぎ、誤解されている側面があることは、正されなければならないであろう。法華経の仏一乗の思想は、それを具体的に述べているものである。<sup>(15)</sup>

ゴータマ・ブッダの教え方も、相手の是とする考えを否定するのではなく、相手の考えを一応は認め、そこからさらに向上する道を教えたように思えるのである。論争はブッダの教えではない。

なお、南方仏教、タイやスリランカの仏教徒に向かって、教科書にあった小乗「ヒーナヤナ」という語が使われはしまいかということに危惧している。その語を聞いた相手に対してきわめて失礼なことになろう。彼らは「上座部仏教徒」(テーラヴァーデーヤン)を称しているのであるから。

## II 「空」とはなにか

### (1) 空の原語について

空の原語は、サンスクリット語では「シューニヤ」(śūnya), パーリ語では「スンニャ」(suñña)である。これらは品詞としては、形容詞、または中性名詞として使われる。すなわち、述語として「……は空である」と表現する。またこの単語には、しばしば抽象名詞を作る語尾 tā をつけて、「シューニヤター」(śūnyatā 空であること、空性)という用語が作られしばしば仏典に現れる。ただ、これらの単語は主語としては用いられないという特徴を持っている。ただし「空亦復空」という場合を除いてではあるが。ここには、空の思想的意味が含まれている。つまり、空という概念を実体としてとらえてはならない、ということなのである。龍樹(ナーガルジュナ)造『大智度論』には、「空という薬を煩惱という病に用いて治癒したとしても、薬が残っていればなおそれがもとで病となるようなものである。」<sup>(16)</sup>とあって空にとらわれることを戒めている。意外なことのように見えるかもしれないが、空の精神を実践主体とする『般若経』には、空とは何かという説明は一切ない。空を主語にして、空に実体があるがごとくに説明することはないのである。空は常に述語表現である。ただ空を比喩表現で説明(後述)するのみである。

#### ◎ 空の原語「シューニヤ」(śūnya)の意味

鈴木学術財団編 [1986] : 『漢訳対照梵和大辞典』講談社によれば、次のような意味がある。

形容詞：からの、空虚な、住む者のない、など。「具格とともに、」～を欠いている。

中性名詞：空虚な場所、中空、非存在、絶対的空(仏教)、零

漢 訳：空，空無，空虚，空義，など。

語源的にみると，sūnya は，sū (=svi ふくれる) の過去分詞 sūna からつくられた。したがって，その単語は，「ふくれあがった，うつろな」，という意味である「ふくれあがったものは中がうつろである。われわれは，ここに実体があると思っている。けれども，実体性はしよせん限定されたものにすぎない。これが未来永久に存在するわけではない。ある限られた時間の間だけ存在するものである。だから，実体性は勝義においていえることではない。究極において認められるものではない。どこまでも限られた意味において実在するものである。実体とみえるものも，本質はうつろである。いつかは欠けて，滅びるものである。」<sup>(17)</sup> 「仏教がこの語を取り上げて用いるときも，それは強い否定の表現であると同時に，究極の真実在を積極的に示唆するものであって，いわば否定を通じての肯定，相対の否定によって絶対を直感することを意図している。」<sup>(18)</sup>

## (2) 空の比喩について

大乘仏教でいう空という意味は，かならずしも空無を意味しているわけではない。存在を実体としてとらえ，執着して苦悩する自己の解放と，他者にたいしては，自他平等の慈悲心から空観を実践するという立場があるのである。空はなんとしても平易に理解されるべきものである。そこで般若経は十種の比喩を用いて空を説明する。比喩表現を多用するのは，インド人の民族性に由来する。インド論理学の五分作法にも「喩」が存在している。比喩は智者に意義を知らしめるために用いられるという。初期仏教の古層に属するとされる『スッタニパータ』、『ダンマパダ』にも比喩表現が多くみられるから，この傾向は仏教初期のころから存在していたものと思われる。般若経に説かれる十種の比喩は次のとおりである。<sup>(19)</sup>

1. 幻 (māyā) 2. 焰 (marīci) 3. 水中の月 (udaka-candra) 4. 虚空 (ākāśa) 5. 響 (pratiśrutkā) 6. 捷鬪婆城 (gandharva-nagara) 7. 夢 (svapna) 8. 影 (pratibhāsa) 9. 鏡中の像 (pratibimba) 10. 化 (nirmita)

この中で特に注目すべきなのは，4. 虚空である。「空」(sūnya) にはゼロ (0) の意味がある。空が否定的な響きを持っているのはそのためである。ゼロはただ何もないという意味だけではなく，十進法からみればゼロを加えることにより，十倍の数値となるのは周知のとおりである。

この数学のゼロの概念は，インドにおいて発見された<sup>(20)</sup>。インド数学では，ゼロを表示する語は「シューニヤ」のほかいくつかあるが<sup>(21)</sup>，その中に「アーカーシャ」(akasa) というものもある。これは虚空の原語である。そしてゼロを表示する語のほとんどが，虚空もしくは雲を意味している。「シューニヤ」にも，「そら」(the sky) という意味がある。これらのことから，ゼロの概念は虚空となんらかの深い関連性が考えられるのである。仏教の空も，理論的というよりは，より具象的に，実践的に，虚空の有様を注意深く観察することによって理解されたのではなかろうか。

ところで，大乘経典には，空の比喩として「虚空」が多く用いられる。

『大日経』では、「空は虚空に等しい」という。

「我本不生を覚り、語言道を出過す。諸の過を解脱することを得て、因縁を遠離したり。空は虚空に等しと知って、如実相の智生ず。」<sup>(22)</sup>

『大智度論』は、諸々の存在（諸法）が空であるのは、虚空の色があるように見えるのと同じであるという。虚空の青色は「くう」（シューニヤ）なのであるという。

「虚空の如しとは、ただ名のみあって実の法なし。虚空は可見の法にあらざるも、遠く視るがゆえに眼に光り転じて標色を見る。諸法もまた是の如し。」<sup>(23)</sup>

また、『大智度論』は、四季の虚空の氣象状態を観察することによって、諸々の存在が空であると観察すべきであるという。荒れすさぶ空の姿も、静まれば台風一過の青空が見えてくる。それを空にたとえるのである<sup>(24)</sup>。

### (3) 空はニヒリズムか？

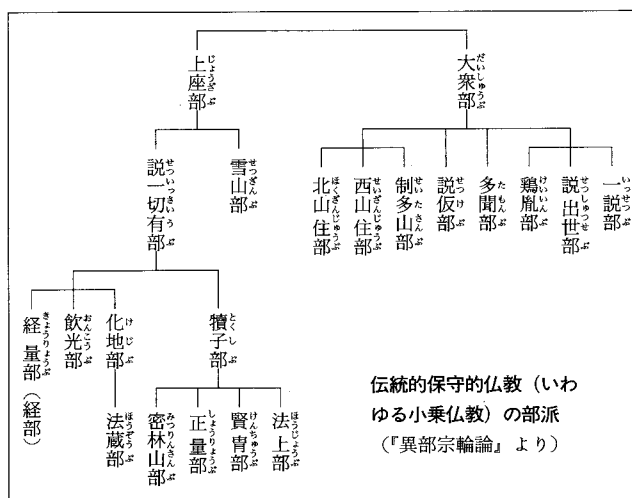
哲学事典には、「ニヒリズム」（nihilism, 虚無主義。なにものも存在せず、認識できず、あるいは価値をもたないとする説）の項目に、「仏教にみられる空の思想も、広義のニヒリズムといえる。」とある<sup>(25)</sup>。空をニヒリズムとするこの傾向は、この哲学事典だけではなく、西洋哲学一般、またインド学者一般からもいわれていることである。

空の理論（空観）を体系的に構築したのは、ナーガールジュナ（龍樹、150～250ころ）を開祖とする中観派である。中観派に対しては、虚無主義（nihilism）、否定主義（negativism）、相対主義（relativism）などのことばで非難、ないし批評されてきた。<sup>(26)</sup> しかもこのような非難は、中観派が興った当時、仏教学者の内部からもでていた。中観派は虚無主義（nāstika）であると。しかしナーガールジュナ著『中論』は有無にとらわれる立場を排斥しており、中観派は虚無主義と批判する人たちを批判しているのである。

さて、般若経における空という原点にもどるならば、空は決して虚無主義などではない。般若経はむしろ、いきいきと、なにものにもとらわれない、悩みなき、恐怖なき楽しい生き方を教えてくれる。それはたとえば、『般若心経』にある「およそ物質的現象というものは、すべて実体がないことである。（色即是空）」ということばのみにとらわれるならば、虚無主義に陥ることもありうる。しかし、そのすぐ後に「およそ実体がないということは、物質的現象なのである。（空即是色）」ということばが続いていることを見落としてはならないであろう。ここには、現象は空であると実感しつつも、現実をそのまま認めるという立場がある。凡夫の苦悩ある姿を観察して、菩薩は一切法は空なり、と知りつつも慈悲のこころを発する根拠がこの短い二つの句にあるのである。これは断じて虚無主義などというものではない。空の思想がもしも虚無主義であるとするならば、自利利他行に勇猛に邁進しようとする菩薩行という大乘は、ありえないであろう。

空とは、「空智」（『弁中辺論』, sūnyatā-jñāna)<sup>(27)</sup>という語が後代作られたように、空を知る智慧は出世間智であり、ありていにいえば「さとり」（bodhi）の別名である。この境地は、般若経でいえば、声聞・縁覚といった仏弟子たちも体験していたはずである。空は、「常にあらず、無常にあらず」とされるが、その前段階として無常を知ることが空の初門で

資料 1



あるといわれる。これは諸行無常が初期仏教において、三法印として説かれて以来連続しているのである。

### III 大乘仏教の先駆的經典・般若経は、なぜ空を説いたのか？

大乘仏教が興った紀元前後のころ、仏教教理の理解をめぐっていくつかの部派に分かれていた。大別すれば、大衆部（だいしゅぶ）と上座部とに分かれ、これを根本二部という。（添付資料1 部派の表記の仕方については諸説ある。ここでは中村元『ナーガールジュナ』（註26）50頁を用いた。）

この二部は初期仏教以来の律蔵をめぐっての解釈の違いに由来するという。すなわち、上座部は伝統的な律蔵を遵守し、他方、大衆部は時代に合った律蔵を作るべきという主張による、といわれている。大乘仏教はこの大衆部の一部からの運動という説もあるが、まだはっきりとしたことは分かっていない。戒律の問題は大きな意味を持っているだけに、大乘仏教発生の仕組みをさぐるヒントになることだけは間違いない。般若経には多くの「良家の息子」(kura-putra, 善男子), 「良家の娘」(kura-duhitṛ, 善女人) という在家の人々が登場し、般若波羅蜜を實踐するが、これは般若経の登場当時の新仏教運動の位置を示唆しているものである。

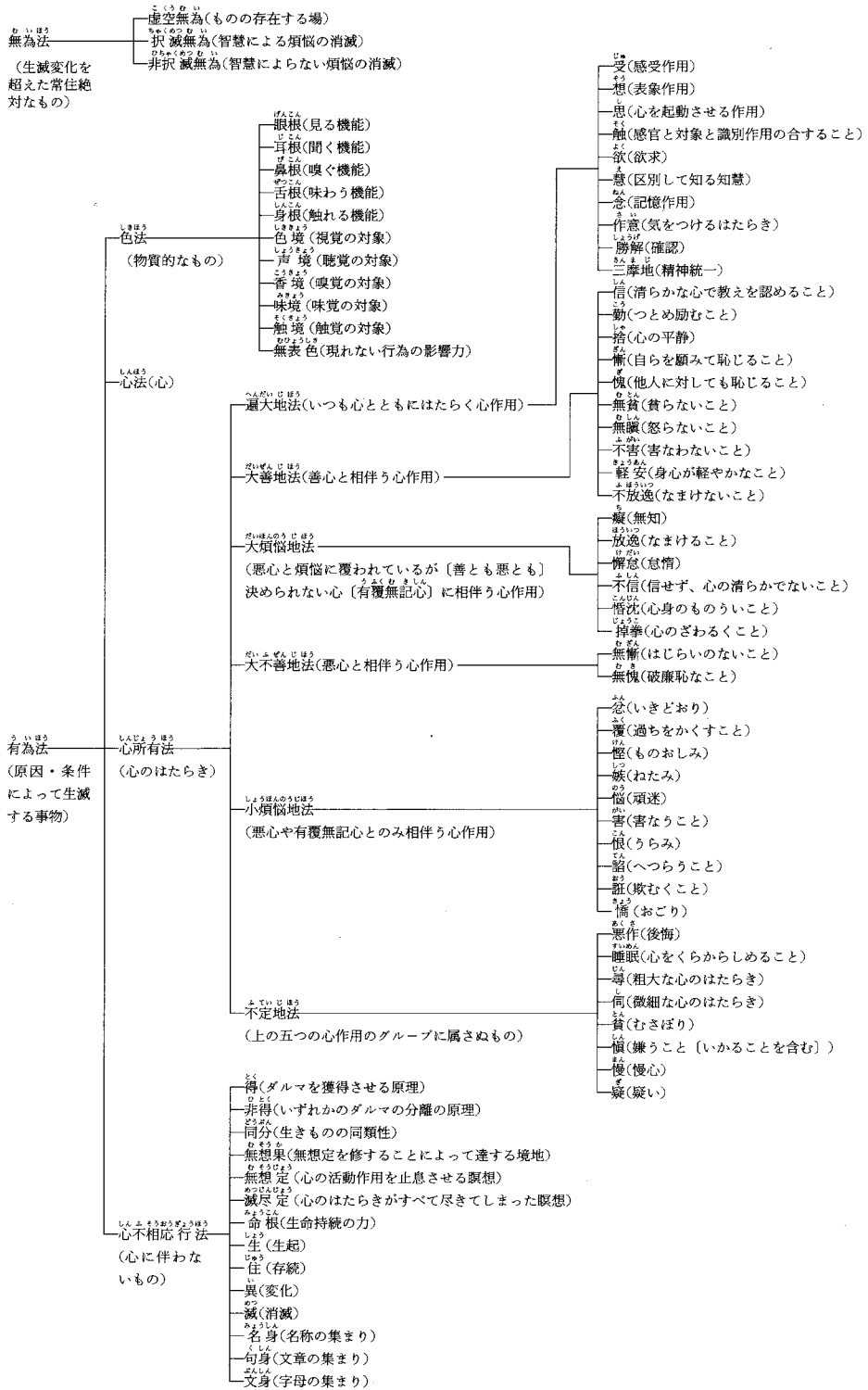
さて、「般若経の空観は、直接には旧仏教部派の中で最有力であった説一切有部の法実有論に対する批判で、空とは縁起説に対する新しい解釈にほかならない」<sup>(28)</sup> というのがほぼ定説である。

ナーガールジュナ著『中論』は、般若経の空観を縁起によって解説する書であるが、この書も、説一切有部の主張「三世実有、法体恒有」を強く意識して書かれたといわれている。

#### (1) 説一切有部について

仏滅後300年のころ、カートヤーヤニプトラが現れて、『発智論』を製作し、有部の教理を確立した。その後も有部においては存在に関する精緻な研究が行われ、世紀2世紀には、カ

資料 2





ニシカ王の外護のもとに、カシュミールで『発智論』の注釈書『阿毘達磨大毘婆沙論』(略して、婆沙論) 200巻が編纂された。その綱要書が数多く作られたが、なかでも4, 5世紀のヴァスバンドウ(世親)の有部の教理を批評的に述べた『阿毘達磨俱舍論』(略して俱舍論)がもっともすぐれている、とされる。<sup>(29)</sup>

説一切有部とは、一切の法の実在を説く部派の意味である。法(dharma 存在)は、過去、現在、未来の三世にわたって実在であると主張する。そして、法の体系として、五位七十五法(添付資料2 中村元『ナーガールジュナ』72~73頁)をあげる。また「我空法有」の立場をとり、大乘仏教の人法二空と対立する。

## (2) 般若経の主張

般若経は、この説一切有部の存在実在論に否定的な響きで対抗する形で「一切法の空」とく。般若経のいう一切法(存在するものすべて)とは、『般若心経』にも現れるが、「五蘊」(色受想行識)、「十二処(六内処=眼・耳・鼻・舌・身・意と、六外処=色・声・香・味・触・法)」、「十八界」(十二処に、眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識を加えたもの)などであり、初期仏教で説かれていた存在(法)の体系をそのまま採用したものである。なお、般若経の原典のうちで最も大部な『十万頌般若』では、「一切法」について次のようにいう。

「一切法とはつぎのものに云われる。すなわち、色・受・想・行・識(五蘊)と眼・耳・鼻・舌・身・意(六内処、六根ともいう)と、色・声・香・味・触・法(六外処、六境ともいう)と、眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識(六識)と、眼触・耳触・鼻触・舌触・身触・意触(六触)と、眼触より生じた受・耳触より生じた受・鼻触より生じた受・舌触より生じた受・身触より生じた受・意触より生じた受と、有色法・無色法と、無為法・有為法とである。これら一切法と云われる。」

続けて次のようにいう。「一切法は、一切法を欠いている。(一切法は一切法として空である)常ではなく、壊ではないから。理由は何であるか。空であることが、一切法の本性(prakṛti)だからなのである。」と。<sup>(30)</sup>

## IV 何が空なのか?

さて、大乘仏教は、われわれの思考の範囲にあるあらゆる存在を「空」とであると主張する。これは、我々が存在に執着することによって愛憎を生じて迷い、真実を見失って、仏教の目標とする「この上ない安らぎ・安楽である涅槃(ニルヴァーナ)」に到達することを妨げるからである。

原始仏教においても空が説かれていたことは、前述のとおりである。『小空経』における空の体験は「空住」(sūnyatā-vihāra)として表現される。心の有様が空であるというのである。そして、「ないものはない、あるものはあるというありのままに知見する立場が、空・不空として表現される<sup>(31)</sup>。また、つぎのような理解もある。『小空経』に、次のような空の定義ともいべき文章がみられる。[何物かがそこに存在しないとき、それは何物かということでは空なのだ、とみる。しかもなおそこに何か余れるものが存在するとき、それ

こそは実在であると知る。] すなわち、欠如・非存在が空であると同時に、その空において究極的な実在が見いだされるのであって、この文章の全体は正しい空の定義として、後世の論書にしばしば引用されている。空が否定とともに肯定を意味する」<sup>(32)</sup>

般若経では、空を観察するときの対象、何が空であるのかについて述べている。大品系般若である『二万五千頌般若』では、十八種の空「十八空」をとく。これらの原型は既に、初期仏教の仏典『舍利弗阿毘曇論』などに説かれていたが、それらに大乘仏教の特色、たとえば「一切法空」などを加えて整備したものである。<sup>(33)</sup>

十八空の名称は、つぎのとおりである。

1. 内空 2. 外空 3. 内外空 4. 空空 5. 大空 6. 勝義（第一義）空 7. 有為空 8. 無為空 9. 畢竟空 10. 無始空 11. 散空 12. 性空 13. 一切法空 14. 自相空 15. 不可得空 16. 無法空 17. 有法空 18. 無法有法空

これらについて簡略に説明すれば以下のとおりである。

内空；六内処（眼耳鼻舌身意。すなわち自己）が空である、と観察する。以下同じ。

外空；六外処（色声香味触法。すなわち外界、六内処の対象）が空である、……。

内外空；六内処、六外処共に空である、……。内外にとらわれないように。

空空；空もまた空である、空にとらわれてはならない、空を実体とみてはならない。

大空；十方（東西南北、四維＝四方の中間の方角、および上下）は空である、……。

勝義空；最高の真理は空である。「維摩経」における「維摩の一黙」のように。

有為空；有為法は空である……。

無為空；無為法は空である……。たとえば、「涅槃」は空である……。

畢竟空；（虚空の）辺際（atyanta）は得られないから空である、……。

無始空；過去と未来、（また現在も）空である、……。

散空；存在は五蘊和合した仮の存在であるから空である、……。

性空；あらゆる存在の本性は空である、だれかが造ったというものではない、……。

一切法空；人間が考察しうるあらゆる存在は空である（前述）……。

自相空；あらゆる存在の相（特徴）、たとえば有為法は無常であるとか、六波羅蜜の特徴とかいろいろな特徴があるが、それらは空である、とらわれてはならない、……。

不可得空；過去、未来の存在は得られない、現在の存在も常住ではないから得られない、したがって空である……。

無法空；非存在、無、あるいは形成されないものは空である……。

有法空；もろもろの存在は因縁和合して存在しているのであるから、存在固有の本質は空である……。

無法有法空；非存在、存在の本質、存在の生滅は本来空である、……。

なお、これらは、順序にしたがって観察されるべき空観であった。まず自己の空を観察し、自我への執着をはなれ（人空）、つぎに自己の所有になると思われる存在（身体や自己の愛

着するもの、在家の人であれば、家族、財産、地位、名誉など）への執着を離れ（法空）が基本となっていることは明らかである。それ以降は想定しうる概念を空とみる実践が連続している。

## V. むすび

この般若経の空観は、やがてナーガールジュナの『中論』、『十二門論』などによって理論化される。その弟子デーヴァの『百論』を加えて三論宗が成立し、我が国へは奈良時代に中国より伝来し、南都六宗の一つに数えられている。

空はなかなか理論としては理解しがたいものではあるが、要は何物にも執着しない生き方の中に体得されるもの（中国的理解の用語を使えば、＝体空観）なのである。

有と無という観念にとらわれないところに、空観の実践がある。たとえてみれば、桜の木は春となり、諸縁が整って美しい花を咲かせる。夏、秋、冬の時期には花の形はおろか何もみえなかった桜の木はいわば空なのである。しかし、それは無ではなかった。春ともなれば、蕾みを生じ、やがて美しい花となる。美しく咲いたその桜の花は「妙有」というべきものであろう。これにより、縁起の理法がそこにあると観察するのである。有ではなく、無でもなく、存在は空であると観察して、苦悩のもととなる執着を離れて彼岸に達し、しかもこの世の美しさを楽しく見るというのが、本当に幸せな生き方なのではないだろうか。空観はそのような意味において現代においてもなお有効性は失われていないのである。

- 注(1) Sn.1119, 中村 元 訳注 [1994]: 『ブッダのことば』 236頁, 岩波書店。
- (2) M.no.121 (III, pp.104-109), 中阿含, 大正1巻, 736頁~738頁。
- (3) M.no.122 (iii, pp.109-118), 中阿含, 大正1巻, 738頁~740頁。
- (4) 小部經典, 南伝大藏經第4 1巻, 「俱存品第十 空論」, 113頁~124頁。
- (5) 大正 28巻, 633頁上~中。
- (6) Dh.p.273, 中村 元 訳注 [2003]: 『ブッダの真理のことば 感興のことば』 48頁, 岩波書店
- (7) Dh.p.274, 同上書, 48頁。
- (8) 坂部 明 [1974]: 拙稿「空と般若波羅蜜」, 『印度学仏教学研究』第22巻第2号。
- (9) 中村 元 [1960]: 『般若心經 金剛般若經』 解題184頁以下, 岩波書店。
- (10) 『大品般若經』 譬喩品 第五十七 (大正8巻, 329頁下~331頁中)。
- (11) 般若經は声聞・縁覚の智慧である「一切智」, 菩薩の智慧である「道種智」, と如来の智慧である「一切種智」を区別する。(『大品般若經』「三慧品」, 大正 8巻, 375頁中。
- (12) 荻原雲来 編 [1973]: *Abhisamayālamkāra'ālokā Prañāpāramitāvyaḥkyā*, pp.94~pp.105 山喜林佛書林, 現代語訳: 梶山 雄一 [1980]: 『大乘仏典 2 八千頌般若經 I』, 35頁~37頁, 中央公論社。
- (13) 大正 8巻, 250頁。
- (14) 大正 8巻, 253頁~256頁。
- (15) 坂部 明 [1986]: 拙稿「般若經にみられる原始仏教思想」, 『初期大乘經典にみられる原始仏教思想一般般若經・法華經を中心として』(昭和58~60年度科学研究費補助金〔一般研究 B〕研究成果報告書。
- (16) 「空空亦如是。又如服藥。藥能破病。病已得破藥亦応出。若藥不出則復是病。」大正 5巻, 288頁。
- (17) 中村 元 [1981]: 『仏教思想6 空 上』平楽寺書店。
- (18) 長尾 雅人 [1979]: 『中觀と唯識』 293頁~294頁。岩波書店。
- (19) 『大品般若經』七喩品 第八十五 (大正8巻, 413頁), N. Dutt; *PVṢ-PP* p.4
- (20) 吉田 洋一 [1979]: 『零の発見』岩波書店。
- (21) kha, gagana, ambara, ākaśa, abhra, vyat, vyoma, nabha, など (Datta & Singh [1962] *History of Hindu Mathematics*, pp.63)。
- (22) 「入曼荼羅具縁真言門第二余」(大正 18巻, 9頁)。
- (23) 「十喩積論第十一」(大正 25巻, 102 中)。
- (24) 同上書, 102頁 下。
- (25) 林 達夫 ほか監修 [1980]: 「ニヒリズム」『哲学事典』平凡社。
- (26) 詳しくは, 中村 元 [1980]: 『人類の知的遺産13ナーガールジュナ』 48頁~50頁。
- (27) M. Nagao: *Madhyāntavibhāga-Bhāṣya*, pp.25, 大正 31巻, 466頁。
- (28) 早島 鏡正 ほか [1982]: 『インド思想史』, 76頁, 東京大学出版会。
- (29) 平川 彰 [1983]: 「序章 3部派仏教の教理」, 『仏典解題事典』13頁, 春秋社。
- (30) N. Ghōṣa [1902]: *ŚS-PP*, pp.1409 ~ 1410, Bibliotheca Indica, work 153, 漢訳では, 『大般若經』初会に相当する。大正 5巻, 291頁。
- (31) 早島 鏡正 [1964]: 『初期仏教と社会生活』 300頁, 岩波書店。
- (32) 前掲書, 長尾 雅人 『中觀と唯識』 294頁。
- (33) N. Dutt 編 [1934]: *Pañcaviṃśatisāhasrikā-PP*, pp.195 ~ pp.198 漢訳では 『大品般若經』「問乘品」第十八 (大正8巻, 250頁中~251頁上) などに見られる。